

論 文

# 「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る 末摘花の鼻についての考察

——『観普賢菩薩行法経』との関わりを起点として——

竺 銀 児

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

A consideration of Suetsumuhana's nose : 「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」

(It seems like the vehicle of the Samantabhadra Bodhisattva)

-The connection with the "Samantabhadra Meditation Sutra" as a base point-

ZHU Yiner

**Abstract:** This paper concentrates on the unsightly figure of Suetsumuhana, which is depicted that it seems like the vehicle of the Samantabhadra Bodhisattva (「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」), and focuses on the metaphor of the vehicle concerned in the story of Suetsumuhana. Here we minutely discuss the doctrine of the pure land of Tiantai Buddhism such as the "Samantabhadra Meditation Sutra". With the background of the story of the goddess in Chapter 7 ("Observing Living-beings") of the "Vimalakirti Sutra", we chiefly conduct explanation on the scene that Hikaru Genji laughed at Suetsumuhana's nose joking with Wakamurasaki.

**Key words:** Suetsumuhana's nose, the vehicle of the Samantabhadra Bodhisattva, Samantabhadra Meditation Sutra, Observing Living-beings Chapter 7 of the Vimalakirti Sutra

## はじめに

『源氏物語』に登場する多くの女君の中で、末摘花は外見から仕草、性格まで極めて特徴的に描かれている存在である。特に印象付けられるのは、「末摘花」という呼称に示唆される彼女の異質の鼻である。

末摘花巻では、大輔命婦の手引きで常陸宮遺愛の姫君としての末摘花に大いに期待する光源氏は、「昔物語」にありそうな魅力的な姫君像を心中に描き

続けるが、ついにある後朝の雪見に彼女の尋常ならぬ醜貌を目にする<sup>1</sup>。

まづ、居丈の高く、を背長に見えたまふに、さればよと、胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり。色は雪はづかしく白うて、さ青に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。瘦せたまへること、いとほしげにさらぼひて、肩のほどなど、痛げなるまで衣の上まで見ゆ。何に残りなう見あらはしつらむと思ふものから、めづらしきさまのしたれば、さすがにうち見やられたまふ。(末摘花① 292～293頁)

右の一文では、末摘花の異常に風変りな顔かたちが光源氏の目の前に容赦なく曝されている。「あなかたはと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる」とあるように、特に醜さが際立つところは鼻の部分である。その鼻は「普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり」という。

この鼻が印象深くて、光源氏はその後「なつかしき色ともなしに何にこのすゑつむ花を袖にふれけむ」(末摘花①三〇〇頁)と紅花の「すゑつむ花」＝「末摘花」のイメージを借りて「先の方すこし垂りて色づきたる」鼻を歌に詠み込んで、女君に対する失望と後悔の念を吐露する。「末摘花」は末摘花巻の巻名ともなっているので、「末摘花」というモチーフに孕まれる、末摘花の容姿を特徴づける鼻の問題が注目に値する。

末摘花の鼻の特質と言え、普賢菩薩の乗物」という比喩が焦点化される。

普賢菩薩は『法華経』普賢菩薩勸發品、法華三部経の結経『観普賢菩薩行法経』、四十卷『華嚴経』入不思議解脱境界普賢行願品などに登場し、「智慧の菩薩」文殊菩薩と対に釈迦如来の脇侍を務める「行願の菩薩」として広く知られている。「騎獅子像文殊菩薩」に対して「騎象普賢菩薩像」が普遍的に享受されているが、普賢菩薩の騎象像は『観普賢菩薩行法経』に精緻に描かれている。象の鼻については、経文に「象鼻紅蓮華色」<sup>2</sup>と見えることから、「先の方すこし垂りて色づきたる」鼻の描写は『観普賢菩薩行法経』に拠っているとされる。

一方、蔵中しのぶ氏は「普賢菩薩と普賢菩薩の乗り物」<sup>3</sup>で、末摘花の容姿

に関する描写と『観普賢菩薩行法経』の経文とを照らし合わせて、「居丈の高く、を背長に見えたまふに、さればよと、胸つぶれぬ」は「身長四百五十由旬。高四百由旬（身の長さ四百五十由旬。高さ四百由旬）」<sup>4</sup>、「あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたる」は「象鼻有華。其莖譬如赤眞珠色。其華金色含而未敷（象の鼻に華有り。其の莖譬へば赤眞珠の色の如し。其の華金色にして含んで未だ敷けず）」、「色は雪はづかしく白うて、さ青に」は「象色鮮白。白中上者。頗梨雪山不得爲比（象の色鮮白なり。白の中に上れたる者なり。頗梨雪山も比べに爲ることを得ず）」とそれぞれ類似していることを見出し、「作者は仏像・仏画だけを参考にしたのではなく、直接的に観普賢経に依拠した可能性が高い」と指摘している。

蔵中氏の指摘によれば、鼻の部分の表現に限らず、末摘花の容姿に関わる具体的な描写はほぼ『観普賢菩薩行法経』から発想を得ていると考えられるが、ここで問題になるのは、「普賢菩薩の乗物」という比喻と末摘花の人物造型、末摘花の物語との関係についてどう理解すればよいのであろうか。

末摘花の仏教信仰の様子について、よく引かれるのが蓬生巻に「今の世の人のすめる経うち誦み、行ひなどいふことはいと恥づかしくしたまひて、見たてまつる人もなけれど、数珠など取り寄せたまはず。かやうにうるはしくぞものしたまひける」とある一節である。同時代の人のする読経や勤行に関心を示していない末摘花は、一般的に仏道から離れている女君と見なされている。蔵中しのぶ氏も、

「普賢菩薩の乗り物」の比喻については、他の巻と同様、仏教思想、とくには法華経にもとづく天台浄土経の影響が考慮されてよいであろう

と提起しながらも、末摘花の仏教信仰への無関心に帰着する。

さて、末摘花の容姿の醜さを象徴し、巻名とも深く関わる「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る鼻の設定を前にして、末摘花の人物像に見る仏教的性質に対する解釈は、彼女が仏教信仰に関心を示していないという結論だけにとどまってよいのであろうか。この問題を解決するには、「法華経にもとづく天台浄土経の影響が考慮されてよいであろう」というのが首肯すべき意見である。本稿は、『観普賢菩薩行法経』をはじめとする天台浄土経の代表的な経典に説かれる仏教思想をたどりながら、「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る末摘花の鼻の設定を読み解いていきたい。

## 1. 末摘花の醜貌について

仏教の観点から末摘花の醜貌の問題について見る際、「善業悪業」の働きに基づく「業因果」「因果応報」の思想がまず想起される。容姿の美醜については、たとえば「げにいと警策なりける人の御容面かな。功德の報いにこそかかる容貌にも生ひ出でたまひけめ(手習⑥二九三頁)」と浮舟の美貌が横川の僧都に「功德の報い」、即ち善業の功德による果報であると称賛されている。一方、『往生要集』大文第五「助念の方法」第四「止悪修善」では、「嫉妬の心を以て妄言誹謗」という「悪業」によって「形容醜欠にして、人は見ることを喜ばず」という「果報」を感じることが述べられている。

では、末摘花は前世の「妄言誹謗」の悪因で今生の「醜貌」の果報を受けたのか。このことについて、今井友子「源氏物語における末摘花の造型—金剛醜女説話の受容について—」<sup>5</sup>では、末摘花と『賢愚経』波斯匿王金剛品第八に登場する波斯匿王の娘金剛醜女との類似性が指摘され、『賢愚経』の該当箇所、

夫人處世。端政醜陋。皆由宿行罪福之報。……由其爾時惡不善心。毀咎賢聖辟支佛故自造口過。於是以來。常受醜形。後見神變。自改悔故。還得端正。……一切衆生有形之類。應護身口勿妄爲非輕呵於人。

「夫れ、人の處世、端政醜陋、皆宿行の罪福の報に由る。……其れの爾の時の惡不善の心に由る。賢聖辟支佛を毀咎するが故に、自ら口の過ちを造る。是に於て以來、常に醜形を受く。後に神變を見て、自ら悔い改むるが故に、端正に還るを得。……一切の衆生有形の類、應に身口を護るべく、妄りに非を爲し人を輕呵すること勿れ。」

とある仏の言葉が引かれている。『賢愚経』に記載される仏の言葉でも、醜貌は「妄言誹謗」という身口の悪業によることが説かれている。また、悪業を自覚して悔い改めれば、「醜陋」の姿から「端正」の姿に還ることができるという。ここでは、仏道修行に欠かせない、罪業を滅するための「懺悔」の問題が視野に入ってくるが、「普賢菩薩の乗物とおぼゆる末摘花の鼻の設定が拠っている『觀普賢菩薩行法経』はまさしく、『法華経』とともに法華懺法に使われる根本的な經典なのである。

普賢菩薩に関する「懺悔」の教義については、四十卷『華嚴経』入不思議解脱境界普賢行願品の終幕に説かれる有名な「普賢十願」<sup>6</sup>の一つ「懺悔業障」が代表的に取りあげられ、なかでも、

我昔所造諸惡業、皆由無始貪恚癡。從身語意之所生、一切我今皆懺悔。  
「我れ昔より造る所の諸もろの惡業は、皆無始の貪恚癡に由る。身語意従り  
生ずる所なり、一切、我れ今、皆懺悔したてまつる。」

が懺悔偈として広く唱えられているのである。「普賢十願」は『枕草子』第一九六段に、

經は法華經さらなり。普賢十願。千手經。隨求經。金剛般若。藥師經。仁  
王經の下卷。<sup>7</sup>

と見え、普賢菩薩の「懺悔業障」の教えも平安時代に深く記憶されているはずであろう。

一方、末摘花の鼻の設定が拠っている『觀普賢菩薩行法經』の該当經文について見てみると、前に掲げた「象鼻有華。其莖譬如赤眞珠色。其華金色含而未敷」の後に、

見是事已、復更懺悔、至心諦觀思惟大乘、心不休廢、見華即敷。金色金光。  
「是の事を見已って、復た更に懺悔し、至心に諦觀して大乘を思惟すること、  
心に休廢せざれば、華を見るに即ち敷け、金色に金光あり。」

と「懺悔」の教えが説かれていることに注意せざるを得ない。普賢菩薩の乗る白象の鼻とその鼻から赤い眞珠色の茎を伸ばして蕾を含んだ金色の蓮華を見終わって、至心に懺悔して大乘の教義を思惟すれば、蕾んだ蓮華が金色の花を開かせて光り輝くのを見ることができるといふ。この「懺悔」の教えを光源氏が末摘花の醜い容姿を目にする場面にあてはめて読むと、光源氏は「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る末摘花の鼻を見て、自ら罪業を懺悔するべきで、そうすれば醜い「末摘花」ではなく、光り輝く美しい「金蓮華」を目にすることができる、ということになるのであろう。

『賢愚經』に記載される仏の言葉から見ると、醜い容姿に生まれる末摘花が前世の罪業を懺悔することが待たれるはずであるが、『觀普賢菩薩行法經』に基づく「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る末摘花の鼻の設定は、どうも末摘花の醜貌を心に難ずる光源氏のほうに懺悔の課題を押ししているように見える。げに、物語の進行上、末摘花巻の結末に光源氏が末摘花の姿を絵に描いて、自分の鼻に紅をつけて若紫と戯れる、という末摘花の醜い鼻を笑いものにする場面が光源氏側に寄せ付けられる懺悔の問題を浮上させていると思われる。この場面について、今井氏は『賢愚經』にある仏の戒めの言葉「一切衆生有

形之類。應護身口勿妄爲非輕呵於人」を暗示させていると指摘している。「業因果」の視点から見れば、この指摘はもつともであるが、「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る末摘花の鼻の設定を意味づけるには論理が足りない。

「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る末摘花の鼻の設定を読み解くには、『観普賢菩薩行法経』に見る「見是事已、復更懺悔、至心諦觀思惟大乘、心不休廢、見華即敷。金色金光」の論理を解せざるを得ない。末摘花の醜い鼻を笑いものにする場面を手掛かりに、この問題を見ていきたい。

## 2. 『維摩経』観衆生品の天女の華（一）

鈴木裕子氏は「『源氏物語』末摘花巻の仏教的要素」<sup>8</sup>で、『維摩経』観衆生品第七に説かれる教えを背景にして末摘花の醜い鼻を笑いものにする場面を読んでいる。

『維摩経』観衆生品には次のような名場面がある。維摩詰居士の部屋に住む一人の天女が菩薩たちと釈尊の声聞弟子たちの上に天華を散らすと、菩薩たちの身に散りかかった華は離れて落ちたが、声聞弟子たちの身に散りかかった華は付着して落ちようとしめない。声聞弟子たちは皆神力を使っても華を離れさせることができない。天女がその理由について説くが、鈴木氏は次の一文を引いている<sup>9</sup>。

是華無所分別、仁者自生分別想耳。若於佛法出家有所分別、爲不如法。若無所分別、是則如法。觀諸菩薩華不著者、已斷一切分別想故。

「是の華には分別する所無し。仁者は自ら分別想を生むのみ。若し佛法に於いて出家せば、分別する所有るは如法ならずと爲す。若し分別する所無ければ、是れ則ち如法なり。諸菩薩を觀るに、華の著かざるは、已に一切の分別想を斷ぜるが故に。」

「分別想」を生じた故に華が身について離れなくなるというわけである。鈴木氏はこの「分別」しないことを説く教えに注目し、光源氏が末摘花の醜い鼻を笑いものにして若紫と戯れる場面について次のように解釈している。その場面の該当本文を掲げておく。

髪いと長き女を描きたまひて、鼻に紅をつけて見たまふに、絵に描きても見まうきさましたり。わが御影の鏡台にうつれるが、いとよらなるを見たまひて、手づからこの赤花を描きつけにははしてみたまふに、かくよき顔だに、さてまじれらむは見苦しかるべかりけり。（末摘花① 305～306頁）

鈴木氏は「髪いと長き女」とは、黒髪が長く美しい末摘花の「美質」を表すものである。そして、「醜さ」の象徴である赤い鼻を「鼻に紅をつけて」とわざわざ描き加えて表現した。源氏がいかに残酷なまなざしで末摘花を見ているかが明らかにされている。自らの鼻に紅を塗って戯れる源氏の姿は、すべてを知る読者の目には、かなり偽悪的に映ろう」と指摘しながら、「仏教的な見地からすれば、美醜の区別も嫌悪の区別も迷いの心から生まれる」ことを提起し、「本当に笑われているのは末摘花ではなく、末摘花の醜さだけしか見ていない光源氏だということになるのではなかろうか」というように評している。

雪の朝に光源氏の目に映る末摘花の容姿はどこまでも見るに堪えない様子であるが、その髪の部分だけは「頭つき、髪のかかりはしも、うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にもをさをさ劣るまじう、桂の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかり余りたらむと見ゆ」と美しく称賛されている。

鈴木氏が指摘しているように、「髪いと長き女を描きたまひて、鼻に紅をつけて見たまふ」という一文において、末摘花の美質を象徴する黒髪とその醜さを象徴する赤い鼻が鮮明なコントラストをなしているのである。黒と赤が鮮烈に区別される画面は、光源氏の心中に去来する美醜と嫌悪の区別を現前させていると言える。

『維摩経』観衆生品の天女の華が声聞弟子たちの身に降り着いてどうしても離れないように、醜さを象徴する赤い鼻に拘って「なつかしき色ともなしに何にこのすゑつむ花を袖にふれけむ」という歌を詠んだ光源氏も、心に付く「末摘花」という赤い花をなかなか振り落すことができない。そして、若紫と戯れるその場面では、光源氏は紅梅を見ても「紅の花ぞあやなくうとまるる梅の立ち枝はなつかしけれど」と末摘花の難点を想起するのである。

ここで、「華」に焦点を当てて「是華無所分別」の教えの前にある天女と舍利弗との問答に注意してみたい。

天女問舍利弗、何故去華。答曰、此華不如法、是以去之。天曰、勿謂此華爲不如法。所以者何、是華無所分別。

「天女、問舍利弗に問えり。何の故に華を去るや。答えて曰く、此の華は如法ならず。是こを以って之れを去るなり。天の曰く、此の華を謂いて如法ならずと爲す勿れ。所以は何となれば、是の華には分別する所無し。」

この問答では、舍利弗が華を振り落して離れさせようとする行動と意思が問題視されている。「何故去華」という天女の問いは神力をもって「去華」に努める声聞弟子たちの行為を焦点化させ、「華」をめぐる双方の見解を導く。舍利弗は「此華不如法」と答えたが、天女は「華」を「不如法」の存在と言ってはいけないと指摘し、その理由としては、「華」には「分別」の念がないのであるから。その後に「若無所分別、是則如法」、「觀諸菩薩華不著者、已斷一切分別想故」と説かれているように、「不如法」であるのは「華」ではなく、「分別」の思いを持つこと自体が問題であり、「分別想」を断ずれば、身に付く「華」も自と離れていくのである。要するに、問題になるのは「華」ではなく、「華」に対して持つ「如法」いかなの「分別」の思いである。

### 3. 『維摩經』觀衆生品の天女の華（二）

天女の「是華無所分別」の教えに関して、『維摩經』觀衆生品ではさらに次のような劇的な展開が見られる。

舍利弗言、汝何以不轉女身。天曰、我從十二年來、求女人相了不可得、當何所轉。譬如幻師化作幻女、若有人問何以不轉女身、是人爲正問不。舍利弗言、不也。幻無定相、當何所轉。天曰、一切諸法、亦復如是、無有定相、云何乃問不轉女身。即時天女以神通力、變舍利弗、令如天女。天自化身如舍利弗、而問言、何以不轉女身。舍利弗以天女像而答言、我今不知何轉而變爲女身。天曰、舍利弗、若能轉此女身、則一切女人亦當能轉。如舍利弗非女而現女身、一切女人亦復如是、雖現女身而非女也。是故佛說一切諸法非男非女。即時天女還攝神力、舍利弗身還復如故。天問舍利弗、女身色相今何所在。舍利弗言、女身色相無在無不在。天曰、一切諸法亦復如是。無在無不在。夫無在無不在者、佛所說也。

「舍利弗の言わく、汝は何を以て女身を轉ぜざるや。天の曰わく、我れ十二年従り來、女人相を求めて不可得なり。當に何れにか轉ぜらるべきや。譬えば幻師の幻女を化作するが如し。若し人有りて、何を以て女身を轉ぜざると問わんに、是の人、正しく問えりと爲すや、不や。舍利弗の言わく、不なり。幻に定相無し。當に何れに轉ぜらるべきや。天の曰く、一切諸法も亦復是の如し。定相有ること無し。云何んが乃ち女身を轉ぜざるを問わんや。即時に天女は神通力を以て、舍利弗を變じて天女の如くならしむ。天は自ら身を化して舍利弗の如し。而して問いて言わく、何を以て女身を轉ぜざる。舍利弗、天女の像を以て答えて言わく、我れ今、何に轉じて變わりて女身と爲れるをや知らず。天の曰わく、舍利弗よ、若し能



く此の女身を轉ぜば、則ち一切の女人も亦た當に能く轉ずべし。舍利弗の女に非ずして、女身を現ずるが如く、一切の女人も亦復是の如し。女身を現ずると雖も、女には非ざるなり。是の故に佛は、一切の諸法は男に非ず、女に非ずと説きたまえり。即時に天女は還た神力を攝めり。舍利弗の身は還復故の如し。天、舍利弗に問えり。女身の色相、今何所くにか在る。舍利弗の言わく、女身の色相は在ること無く、在らざること無し。天の曰く、一切諸法も亦復是の如し。在ること無く、在らざること無し。夫れ在ること無く、在らざること無きは、佛の諸説なり。」

右の経文では、まず舍利弗のほうから天女に何故女の身を転じて変えないのかと問い出す。天女は「幻師化作幻女」の喩えで一切の諸法は幻の如く定相がないことを論じた後、なんと神通力で舍利弗を天女自身の姿に、自分を舍利弗の姿に変え、舍利弗と同じ質問を投げかける。不意をつかれ、天女の姿になってしまった舍利弗は何故か女の身に変じてしまったのであると答えるのみ。そこで、天女は目前の「舍利弗非女而現女身」という現象を指摘して、「一切諸法非男非女」を説く。最後に、天女はまた二人の姿を元に戻して、「女身色相」がどこにあるかを問う。舍利弗は「女身色相無在無不在」と悟り、天女も「一切諸法無在無不在」を説いて応じた。

このドラマチックな一幕に演じられる天女と舍利弗との身分交換は、「一切諸法無有定相」、「一切諸法非男非女」、「一切諸法無在無不在」の教えを闡明しているわけである。「男」と「女」、「無在」と「無不在」という二項対立をなす事象が幻の如く、実質としては「無有定相」であるのは、二項対立を越える現象世界の「空」の実相を説く大乘仏教の思想である。「一切諸法非男非女」「女身色相無在無不在」については、『維摩経』方便品第二に見る、身のはかなさを喩える、いわゆる「維摩経十喩」の経文の部分に「是身如影從業縁現。是身如響屬諸因縁（是の身は影の如し、業縁従り現ず。是の身は響の如し、諸もろの因縁に屬す）」と説かれていることから分かるように、身は「影」と「響」のように因と縁によって成立し、現れるものであるため、「男」と「女」の身も実質の持たない「空」の存在である。「一切諸法無有定相」も、因と縁によって成立しているすべての現象における「空」の実相を指して言っているわけである。大乘仏教の菩薩たちとしては、一切の「分別想」を断じて対立をなす事象のどちらの一方にも捉われずに、因縁の現象世界をありのまま認識し、「空」の実相を観察し悟ることが求められているのである。

#### 4. 末摘花の鼻を笑いものにする場面と『維摩経』観衆生品

ここで、光源氏が末摘花の鼻を笑いものにして若紫と戯れる場面に戻って見ると、『維摩経』観衆生品に見る「華をめぐる天女と舍利弗との問答」、「天女と舍利弗との身分交換」という二つの場面がすべて『源氏物語』に用いられている可能性に気付く。

『源氏物語』では、「髪いと長き女」の鼻に紅をつけて描いた光源氏が鏡に映る自分の「いときよらなる」顔を見て、わざわざ自分の鼻にまで紅を塗りつけて赤く染めさせ、「かくよき顔だに、さてまじれらむは見苦しかりけり」と自嘲する。この情景を「天女と舍利弗との身分交換」の場面と照らし合わせて読むと、光源氏の末摘花の様子をまねて鼻に紅をつけるいたづらが天女の神通力を使って舍利弗を自分の姿に変え、女の身にならしめるいたづら、自分の「いときよらなる」顔に満足して末摘花の「見苦し」い赤い鼻に嫌味をさす光源氏の設定が、「男」と「女」の身の区別に拘って、天女に「何以不轉女身」を問う舍利弗の役にそれぞれ類似していることが見られる。また、「わが御影の鏡台にうつれるが、いときよらなるを見たまひて」という物語場面の設定も次の『維摩経』観衆生品の冒頭における文殊菩薩と維摩詰との問答に基づいているように思われる。

爾時文殊師利問維摩詰言、菩薩云何觀於衆生。維摩詰言、譬如幻師見所幻人。菩薩觀衆生爲若此。如智者見水中月、如鏡中見其面像、……  
 「爾の時、文殊師利は維摩詰に問うて言く、「菩薩は云何んが衆生を觀ずるや。維摩詰は言えり。譬えば幻師の幻する所の人を見るが如く、菩薩の衆生を觀ずること、此の若しと爲す。智者の水中の月を見る如く、鏡中に其の面像を見る如く、……」

観衆生品の冒頭では、文殊菩薩が維摩詰にどうやって衆生を觀ずるべきかを問う。品名のとおり、観衆生品は衆生を觀ることについて法を説いているのである。維摩詰が「譬如幻師見所幻人」と答えているが、舍利弗の「何以不轉女身」の質問に対して「幻師化作幻女」の喩えで「一切諸法無有定相」を説く天女の答えに通じている。そして、「譬如幻師見所幻人」に次いで「如智者見水中月、如鏡中見其面像」という喩えが並べられている。智者が「見水中月」、「鏡中見其面」のように衆生を觀ずる菩薩は、一切の「分別」の念を生じずに衆生を因縁が合して現れる「幻」の存在として見ているわけである。身の「幻」については、同じく『維摩経』方便品第二の十喩の經文には、

是身如幻、從顛倒起。是身如夢、爲虚妄見。

「是の身は幻の如し、顛倒従り起こる。是の身は夢の如し、虚妄の見爲り。」

と見え、「顛倒」の認識、「虚妄」の見方から生じる「如幻如夢」の身が説かれている。

『源氏物語』では、光源氏が鏡に映る自分の顔を見るが、彼は自分の顔を「いとよらなる」と見ながら末摘花の赤い鼻の醜さを思い浮かべ、あくまでも美醜の区別に拘り続けているのである。「是身如幻」の教えから見れば、光源氏の目に映る「いとよらなる」顔も、「見苦し」い赤い鼻もすべて彼の「分別」の思い、「顛倒」の認識から生じており、万物の「空」の実相を見る真実の見から遠く離れる「虚妄見」である。光源氏の「虚妄見」を描き出すには、物語では意図的にもさらに次のような場面が語られている。

源氏「まろが、かくかたはになりなむ時、いかならむ」とのたまへば、紫「うたてこそあらめ」とて、さもや染みつかむとあやふく思ひたまへり。そら拭ひをして、源氏「さらにこそ白まね。用なきすさびわざなりや。内裏いかにのたまはむとすらむ」といともめやかにのたまふを、いといとほしと思ひて、寄りて拭ひたまへば、源氏「平中がやうに色どり添へたまふな。赤からむはあへなむ」と戯れたまふさま、いとをかしき妹背と見えたまへり。  
(末摘花① 306 頁)

この場面では、光源氏がまたいたづらをする。彼は鼻につけた紅を拭き取るまねをして、鼻が赤く色づくまま白くならない様子を装って若紫に見せる。この様子を見て本気に心配する若紫も傍に寄って拭き取ってあげるのである。鼻につく紅を拭き取る情景をありありと現前させるこの場面に、声聞弟子たちが神力を使ってでも身につく華を落として離れさせようとする場面を重ねて読むと、末摘花の鼻を笑いものにする光源氏が天女に「是華無所分別、仁者自生分別想耳」と言われる舍利弗の如く、「分別」の念に捉われる心に気づかず、誤って「華」＝「赤花」＝末摘花の「鼻」を「不如法」の存在とみなしていることが戯画化されていると読み取れる。光源氏は冗談ぶって若紫に「平中がやうに色どり添へたまふな」と告げているが、末摘花の赤い鼻を弄ぶ光源氏こそが「分別」の思いで心に余計な色が染みついているのであると言えよう。

以上、鈴木氏の論を踏まえながら、『維摩経』観衆生品の天女が登場する物語的場面とその教えを背景にして、光源氏が末摘花の絵を描いて若紫と戯れ

る場面を解釈してみた。絵を描くことと心の「分別想」「虚妄見」については、『華嚴経』に、「譬如工畫師、分布諸彩色。虚妄取異相、大種無差別（譬へば工みなる畫師の、諸の彩色を分布するが如し。虚妄に異相を取るも、大種に差別無し）」、「心如工畫師、能畫諸世間（心は工みなる畫師の如く、能く諸の世間を畫く）」という有名な箇所があり、末摘花巻の最後の絵を描く場面そのものが經典に基づいて周到に用意されている可能性を窺わせる。

光源氏が「分別想」「虚妄見」によって美醜の区別をつけ、執拗に末摘花の鼻の醜さに拘り続けているというならば、『觀普賢菩薩行法経』に「見是事已、復更懺悔」と教えているように、「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る末摘花の鼻を見て、自ら罪業を懺悔することがまさに光源氏のほうに要せられているのである。また、「至心諦觀思惟大乘、心不休廢、見華即敷、金色金光」とあるように、「分別想」を断じて「幻師見所幻人」のように衆生を觀ずる菩薩の目で末摘花の鼻を見れば、目に映るのは醜い「末摘花」ではなく、「金色金光」の美しい「華」になるわけである。

『觀普賢菩薩行法経』に「至心諦觀思惟大乘、心不休廢」とあるのは「懺悔」の過程を指しているが、大乘の教義を「諦觀」、「思惟」して「分別想」を断ずる菩薩の境地を求めることであると考えられる。こういう「懺悔」の教えについても具体的に見ていく必要があるが、次の課題とする。

## おわりに

本稿は末摘花の容姿の醜さを象徴し、末摘花巻の巻名とも深く関わる「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る末摘花の鼻の設定に焦点を当て、『觀普賢菩薩行法経』をはじめとする天台浄土経の代表的な經典に説かれる仏教思想を辿りながら、「普賢菩薩の乗物」という比喩と末摘花の人物造型、末摘花の物語との関係について論じた。

「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る末摘花の鼻の設定が『觀普賢菩薩行法経』によるものであるとされているが、蔵中氏の論は鼻を含む末摘花の容姿の描写と『觀普賢菩薩行法経』の経文との類似の指摘に留まっており、今井氏の論は末摘花の醜貌に関する「業因果」の視点を呈しただけで、「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」という比喩を意味づけるには論理が足りない。

一方、鈴木氏は『維摩経』觀衆生品の天女が華を散らす物語的場面と天女の「是華無所分別」の教えを背景にして、光源氏が末摘花の鼻を笑いものに

して若紫と戯れる場面を分析し、美醜と嫌悪の区別に執着する光源氏の内面を指摘した。鈴木氏の論を継承して、『維摩経』観衆生品の天女が登場する物語的場面を再確認すると、天女が華を散らす物語的場面と関わる「華をめぐる天女と舍利弗との問答」、「天女と舍利弗との身分交換」という二つの場面がすべて末摘花の鼻を笑いものにする場面に用いられている可能性を見出し、「分別想」、「虚妄見」によって美醜の区別をつけ、執拗に末摘花の鼻の醜さに拘り続ける光源氏の人物像をより明らかにした一方、このような光源氏が『観普賢菩薩行法経』に説かれているように、「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る末摘花の鼻を見て、自ら罪業を懺悔して「分別想」を断ずれば、醜い「末摘花」ではなく、「金色金光」の美しい「華」を目にすることができるのであるという論理に辿りつくことができた。

「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る末摘花の鼻の設定を読み解くには、『観普賢菩薩行法経』に説かれる「懺悔」の教えについても確かめなければならない。末摘花巻以降の末摘花の物語を視野に入れて考察する必要が考えられるが、稿を改めて論ずる。

## 注

- <sup>1</sup> 以下、『源氏物語』本文の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）により、巻名・冊数・頁数を付した。傍線筆者。
- <sup>2</sup> 仏典の引用は『大正新脩大蔵経テキストデータベース』（大蔵経テキストデータベース研究会〈SAT〉）による。経典の訓読は特記しない限り『新国訳大蔵経』と『昭和 new 纂国譯大蔵経』による。
- <sup>3</sup> 『国文学解釈と鑑賞 別冊 源氏物語の鑑賞と基礎知識 No.13 末摘花』至文堂、2000年所収。
- <sup>4</sup> 『観普賢菩薩行法経』の訓読は法華経普及会編『真訓両讀 妙法蓮華経並開結』（平楽寺書店、1977年）により、適宜改めた。
- <sup>5</sup> 『和漢比較文学』第52号2014年2月所収。
- <sup>6</sup> 普賢菩薩が求法の善財童子に「礼敬諸仏、称赞如来、広修供養、懺悔業障、随喜功德、請転法輪、請仏住世、常随仏学、恒順衆生、普皆回向」という十願を説く経文の部分である。
- <sup>7</sup> 『枕草子』本文の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。
- <sup>8</sup> 『駒沢大学仏教文学研究』第12号、2009年3月所収。
- <sup>9</sup> 鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』。